

## 四万十川流れて～幡多昔むかし～＝幡多民話と風土の会＝

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は、四万十川の下流域から、「幡多 民話と風土の会」についてお伝えします。



“幡多民話と風土の会”のメンバーの皆様

### 四万十川流れて～幡多昔むかし～

四万十川は流路延長 196km。上流と下流では川の様子が全く違うように、源流の一筋の水脈でつながってはいても、その文化は地域ごとにそれぞれ違って、当然ながら豊かな個性を持っている。

幡多（はた）地方とは、高知県南西部の昔からの呼び名で、四万十川流域で言えば中流から下流域にかけてのエリアを指す。ここはその昔、東部の“土佐の国”とは別の経済圏を形成していたということで、“土佐弁”とは少し違う独特の柔らかいイントネーションの言葉遣いやその文化の中に、“別の国”だった面影を今でも感じることが出来る。

昨年末、この幡多地方で、元教員ら14名で作る「幡多民話と風土の会」（代表：谷口平八郎）が、昔話や自然・生活にまつわる話を収録した郷土誌『四万十川流れて～幡多昔むかし』を発行した。

この本は、民話と風土という視点から編集されていて、地元の古老から丁寧に聞き取った“実際の語り”を元に書かれた昔話だけではなく、昔の暮らし・風土、また流域の山や景観、植物についてもそれぞれの研究者が執筆している。

「今回は、単なる昔話の本ではなく、昔の生活を伝えるものに、昔の人々の森や水に対する想いを昔話の中に込めたかったのです。というのは、今の四万十川は、水量水質共に、この昔話の当時のような“清流”ではなくなってきつつある。この危機的状況を、上流から下流までの皆の力を結集して何とかしたい、想いを皆で共有したいという願いがあったからです。自然と一体化していた昔の流域の生活を、今一度かみしめて、そこを出発点とすることが大切と考えたのです。」

### 昔話を語ること、耳を傾けること

「30年ほど前1981年に、1冊目の昔話だけ収録した『幡多のむかし話』を出版した当時は、まだまだ地域に“語り部”がいました。その後1990年に2冊目となる『幡多昔むかし』を私家版として出しました。その時、訪ねて行ってお話を伺えた方々は、お元気ではあったが既に90歳を超えていました。そして今、当時お話をして下さった方々のほとんどが他界されています。お話を伺った方々のお声を聞くことも、もう出来ない。このまま語り継ぎをせず、この“お話”が途切れても良いのかと思ったとき、それは絶対に語り継いでいかねばならないと考え、志を同じくした者が集まり、発掘したお話を精選し、推敲を繰り返して、後世まで残したいものを、今回この本に掲載したのです。」

当初からその編集の中心となって活動していた谷口さんは、当時のことをこう話してくれた。

「ある時、二人のおばあちゃんそれぞれに昔話を聞いたのですが、一人のおばあちゃんが話した昔話に、もう一人が『あんだ、そんな話、よう知っちゃうねえ（よく知っていますね）』と言うんですよ。今まで一度もそんな話を、友達である私にすらしてくれたことがなかったと。それは、押し並べて、昔話というのは子や孫に伝えるものだからです。」

だから、聞き手が身近にいなくなった今、聞こうとする子、聞こうとする人がいないところでは、昔話はもう話すこともない、伝わっていかないということになります。」

私たちの祖先が昔から語り継いできた民話の数々も、伝えてくれる人がいなくなれば、永久に消えてしまうことになる。語りつぎ、読みついで、先人の心を伝えていかなければと思う。

### 昔話の語ること

この本を発行するにあたり、一番に心掛けたことを谷口さんは次のように語ってくれた。

「語り手の心を生かすこと」を一番に考えました。だから、語られたままの土地の言葉でこの本は書かれています。それは、語り手の方々は“我が事”として昔話を語っているからです。我が人生と重ね合わせ、昔話に共感し、心情を吐露しているのです。だから、昔話には、何百年、何千年の間、吐露されてきた先人の生き様が凝縮されている。それをそのまま伝えたい。」

先人たちは、気の遠くなるような昔から、先祖から伝わった昔話を、大事に、大事に、子や孫に伝えてきた。

「昔話の意味というのは、人々がそこから何を学ぶかという視点ではなかろうかと思うのです。そこに込められている深い意味、庶民の深い悲しみ、それらを跳ね返して生きてきた人々のおおらかさ、力強さをこそ学ぶべきだとの境地に、やっと達したのでした。」

### 昔話とは、“昔の話”なのか、

2009年、四万十川流域は国の重要文化的景観に選定された。人と自然が作り上げた景観が、国の文化財になったのだ。

山の暮らしについての執筆担当、津野幸右さんはこうも話してくれた。「今現在の、目に映る四万十川流域の風景のこのことを考えると、問題の本質がわからないと思います。山に目を移せば、そこは恐ろしく荒廃している。原因は何なのか、そういうところまで考えてもらうきっかけに、この本がなればと思っています。」

“幡多昔むかし”の中に“万爺の四万十川の今と昔”を執筆し、ご自身の川への想いを綴ったという多賀一造さんはこう話す。「最近、四万十川の廻りに住む人々の川への想いが貧相になってきているのを感じます。“自分の命につながっている川”という発想がないのです。川・資源を大事にする心が無くなっています。川も荒れたが人間も荒れてきたのは、寂しい限りです。」

「昔話に込められた“想い”というのは、昔の人々の自然に対する畏怖畏敬の念だと思います。昔の日本は多神教の世界。水に住む神や山に住む神などがいました。河童も水神の使いなのです。四季折々に祭事があり、神様が住む水だから清浄に保たねばならないというような考えが出来た。そこには、今よりももっともっと自然を敬う心があったと思いますよ。」

ところで、今年は少し遅いながらも四万十川流域にも春が訪れた。春の初め、四万十川流域では、植物学者の牧野富太郎が好んだ花“バイカオウレン”が開花する。この本は、四万十川流域の植物についても書かれている。

「流域には四季折々の花が咲きます。花をモチーフにした話も多い。だから、この本はガイドブックとしても持ち歩けるように、読んだ方々が自然環境や昔の生活にまで想いをよせられるよう書きました。」執筆担当の杉村和男さんが語ってくれたページに掲載された花の写真是、どれもモノトーンなのだが、何かその鮮やかな色までもが想像できる。同じ様に、昔話には、色までも想起するような、人の想像力をかき立てるような、何かがあるようだ。

さて、いずれ、今の時代も“むかしむかし・・・”と語られるようになるだろう。その時に、四万十川とその流域に伝わる昔話の数々が、この花々のように鮮やかな色を放って残り続けていることを、私はそのことを、あらためて強く願ってみた。

(取材/記事：矢野由美子)

